30amS-056

日向薬（くすり）事始め（その 16）－日向における種痘の歴史－再考（Ⅳ）、日向国、延岡藩を中心とする各藩の種痘の稿矢

○山本　郁男[1], 岸　信行[2,3], 高村　徳人[2,4], 宇佐見　則行[5]([1]前、九保大薬, [2]九保大QOL研究機構, [3]宮崎、日向、富高薬局, [4]九保大薬, [5]奥羽大薬）

【はじめに】嘉永 2（1849）年 7 月に長崎を起点として全国に拡まった種痘前線は、8 月 8 日に佐賀、京都 9 月 19 日、大坂 11 月 7 日、その年の 11 月 11 日には早くも江戸まで到達している。当然、距離的に近い九州各藩は直ちに実施されたものと考えられるが、日向のみは史実に混乱と空白があることがこれまでに判明している。特に、延岡藩（内藤家、7 万石、譜代）は、これまで報告したように全く記載がない (1)。そこで今回、先に見出した若山健海著、嘉永酉載「種痘人名録」(2)（以下「人名録」と略記）中、延岡藩の種痘の稿矢に関係する項目を見出したので報告する。【結果と考察】本「人名録」は歌人、若山牧水の祖父、医家、健海（1811～1887）が残した嘉永 2（1849）年 3 月 6 日より慶応 2（1866）年 8 月 3 日までの 244 名の種痘を施した 1 歳～21 歳までの人名録であり、もし、本「人名録」が真本であれば日本の種痘史を改新しなければならない。我々は、これについて目下調査中であるので、ここでは触れないこととする。本文中、延岡藩の種痘に関しては、3 項目がある。（1）「安政 2 卯 11 月、臼州延岡〇〇片寄痘種求自岡城植来」、（2）「嘉永 2 年 3 月 21 日、宮崎御陣屋、菅波平右衛門、孫男九才」、（3）「文久 3 年亥歳、延岡、児玉貞斎種」である。この他、高鍋藩（秋月家、3 万石、外様）、佐土原藩（島津家、3 万石、外様）、飫肥藩（伊東家、5 万石、外様）についても言及し、この原因について若干の私見を報告する (3)。（数字は便宜上、全て算用数字に改めた。）【文献】（1）延岡郷土史・年代表、延岡市文化連盟、㈱ながと（1998)、（2）大悟法利雄、若山牧水伝記篇、東京、二見書房（1944)、（3）山本郁男、日向の医人達－日向医薬事始め、㈱ながと（2012)。